

昭和三十四年度における漢文教育研究会の動向

志賀 朗

漢文教育に全国的な組織を持つという気運が高まり、その実現を見たことが、なんといつても今年度の画期的な収穫である。高等学校教育課程「国語科」改訂案に対して、統一ある強力な行動を展開するためには、是非ともそうした機関が必要であるという意見がその結成を促進させたことは確かであるが、他面、既成の漢文研究会の中には、マンネリズムに陥って、時代の流れに応じきれない傾向もあがわれ、新しい漢文教育の提唱が、大きな動因となった。こうして生まれ出たのが全国漢文教育連絡協議会である。出発当初における構想は、漢文の既成団体を一本にし、漢文教育学会としよとうという案であったが、気熟さず、連絡協議会で止まったことは、かえすがえす残念の極みであるが、この協議会が、「国語科」改訂案に対して、推進の母胎となり、漢文教育の意見を統一して、今日に至ったことは、以て銘すべきである。希くば近い将来において、名実ともに一本化し、漢文教育のために、新しい生吹きとなることを希望してやまない。

次に一年間の経過運動を略述しよう。

六月二十九日 新宿高校

上原小由基、小嶋(墨川)、田波盛尊の三高校長連名による「高等学校教育課程国語科改訂案」に対する意見書を関係者に配布、上

原、小嶋両校長より経過報告、志賀大尊の全国的組織の必要性の強調、および懇談。

七月二日 小山台高校

全国漢文教育連絡協議会結成準備懇談会、会の目的、組織、会則等の件について意見交換。会結成に賛成。

七月十三日 小山台高校

上原小由基校長より校長協会国語部会の見解の説明。協議会々則案審議。趣意書作成依頼(原校長)

七月十八日 小山台高校

会則再審議。幹事選出(曾延)。会長に上原校長を推薦。

七月三十日 小山台高校

協議会誕生。第一回役員会開催。副会長に阿部(大塚漢文教育協会)池野(全漢文教育懇談会)を選出。当面の問題は「教育課程の研究」とする。会則決定。役員名簿作成。

八月十日 小山台高校

教育課程具申案作成準備のための意見交換。教育大、懇話会、教育大附属高、小山台高案などを一覧表にする。審議の結果協議会の名において、「要望書」作成。

九月二十一日 斯文会

福岡県国漢研究部陳情代表村名、行実兩氏の教育課程「国語科」に対する意見聴取。上原会長その他より校長協会主催の「公聴会」出席の模様の説明。

十月二十一日 小山台高校

高校長協会案について①漢文の比率十分の二を明示させる。②二年でも漢文の選択ができるようにするなど討議。

十一月五日 斯文会

十月十五日付高校長協会最終案について討議。

十二月一日 斯文会

要望書作成について意見交換。十二月一日付「要望書」作成。

十二月六日 斯文会

加藤常賢、高田貞治、内野熊一郎博士等、学識経験者を招いて意見聴取。小委員会結成。

十二月七日 斯文会

小委員会開催。運動方法の検討

十二月十五日 斯文会

上原会長文部省から意見を聴取されることについての対策研究。

漢文学習上の問題点について討議。

十二月十七日 斯文会

「漢文学習上の問題点」作成。上原会長の報告。

三月三日 斯文会

文部省より藤井、渋谷両事務官を招き、教育課程の現状と、国語科改訂の基本方針および問題点について討議。声明書提出に決定。

以上が協議会の経過の概要であるが、この協議会の構成は、現在のところ左の四団体である。

- 大学漢文教育研究会 (京都)
- 全国漢文教育懇話会 (鹿野)
- 高等学校漢文教育研究会 (上原)
- 東京都高等学校漢文教育研究会 (中里)
- なお会則には、「趣旨に賛同するその他の関係団体」とあるから、ふらって参加をお願いし、筆を置く。(この原稿作成にあたり、小山台高校の青木木寛哉先生の御協力を感謝する。)

(東京都立大泉高等学校教諭)

昭和三十四年度研究発表会

研究発表要旨

一、江南義疏家と王弼佚注

高松 高 藤 原 高 男

江南義疏家に論疏二家の存在すること、及び、王弼繫辭伝注の存在したてであることは、既に論証した所であるが、茲に、王弼易注の原来の体裁を推定し、その伝来の系統を推定せんとする。更に、道藏に見られる王弼老子注の佚文を提示し、綜合的にそれらの意義を考察せんとするものである。

二、唐代説に含まれる詩について

新潟大学 内 山 知 也

唐代小説は往々にしてその作品の中に詩編を含む。こういう散文